

ダイジェスト版

# 大学生の学習・生活 実態調査報告書

現在の大学生は、  
大学で何を習得し、考えているのか？

Benesse 教育研究開発センター  
では、2008年10月に、全国の大学生  
を対象に、大学での学習と生活  
実態についての調査を行いました。  
ダイジェスト版では、調査  
結果のなかから、特徴的なデー  
タを取り上げてご紹介します。

## 本調査のねらい

本調査は、大学生を取り巻く社会状況や教育環境が変化するなかで、大学生の学習・生活全般にわたる意識や実態、さらには大学での学習成果をとらえることを目的に実施された。また大学生の属性について、学年、性別、専攻する学部系統はもとより、在籍している大学の設置区分、大学の所在地、入試方法、さらには高校時代の学習実態や受験に関する項目についても調査を実施しているのが大きな特徴である。また今後の大学生の変化を追うことが可能となるよう、経年での比較ができるように配慮した調査設計がなされている。

## 調査概要

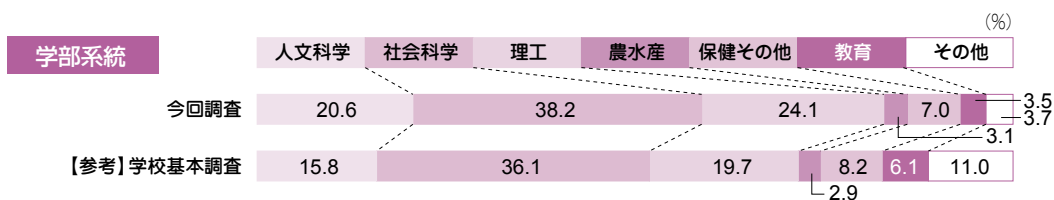
- 調査テーマ 大学生の学習・生活に関する意識・実態調査
- 調査方法 インターネット調査
- 対象と抽出方法 18～24歳の大学1～4年生（ただし留学生、社会人経験者を除く）。約80万人のモニター母集団より上記属性に該当する者のうち、文部科学省の『平成20年度学校基本調査（速報）』の男女比・学部系統別の比率を参考に、無作為に抽出しアンケートへの協力を依頼。大学1年生1,017名、2年生1,013名、3年生1,017名、4年生1,023名となった時点で調査を終了した。
- 有効回答数 4,070名（うち男子2,439名、女子1,631名）
- 調査時期 2008年10月上旬
- 調査項目 大学の設置区分／大学所在地／専攻する学部系統／居住形態／中学受験の有無／高校受験の有無／高校の種類／高校の所在地／高校生活で取り組んだこと／高校での学習実態／大学進学を意識し始めた時期／大学選択で重視した点／大学受験対策として取り組んだこと／大学受験のときの入試方法／大学への志望度／大学の満足度／大学生生活で力を入れてきた活動／大学への通学日数／部活動・サークルへの参加状況／アルバイトの実施状況／通学時間／1週間の過ごし方／1ヵ月の収入／授業への出席率／大学での学習状況／大学での成績／大学生生活を通じて身につけたこと（大学での学習成果）／卒業後の進路の検討状況／社会観・就労観／保護者との関係 など

## 目次

大学進学を意識し始めた時期	4	大学での適応度	10
大学選択で重視した点	5	大学生の学習・生活実態	12
大学受験のときの入試方法	6	サークル、アルバイトについて	13
受験対策として取り組んだこと	7	大学での学習成果	14
大学進学に対する意識（志望度）	8	大学生の社会観・就労観など	15
大学満足度	9		

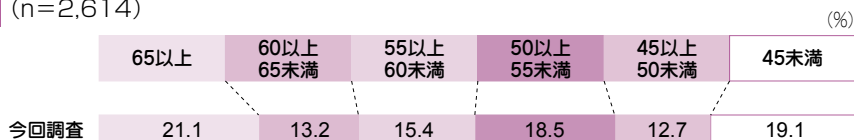
## 基本属性

以下で説明する基本属性は、有効回答数4,070名を母数とした数値である。なお参考として、文部科学省による『平成20年度学校基本調査(速報)』(以下、学校基本調査と略)の結果を掲載している。



学部系統の区分	調査票で示した学部系統
人文科学	人文系統(文学、心理学、文化学など) 外国語学系統(外国語学部など) 国際学系統(国際関係学、国際情報など)
社会科学	社会学系統(社会学部、社会福祉学部など) 法学系統(法学、政治学、政治経済学など) 経済学系統(経済、経営、商学部、流通学など)
理工	理学系統(理学部、生命科学、地球環境など) 工学系統(理工学部、システム工、情報工など)
農水産	農学・水産学系統(農、水産、生物資源、獣医、酪農など)
保健その他	保健衛生系統(保健、保健医療、看護、看護医療など) 医学(医学部) 歯学(歯学部) 薬学系統(薬学部など)
教育	教育学系統(学校教育学など)
その他	生活科学系統(家政、食物栄養、人間発達、保育など) 芸術系統(造形、音楽など) 総合科学(総合)系統(総合科学、教養、環境情報など)

## 入試難易度 (n=2,614)



入試難易度は、在籍している大学名の回答があった2,614名(全体の64.2%)に対して、進研模試(ベネッセコーポレーション)の入試難易度ランキングの偏差値を参考にして割り当てた。なお「65以上」には旧帝大などの難関大学、「60以上65未満」「55以上60未満」には大都市圏の有名私立大学などが該当する。

### 【本調査結果を読む際の留意点】

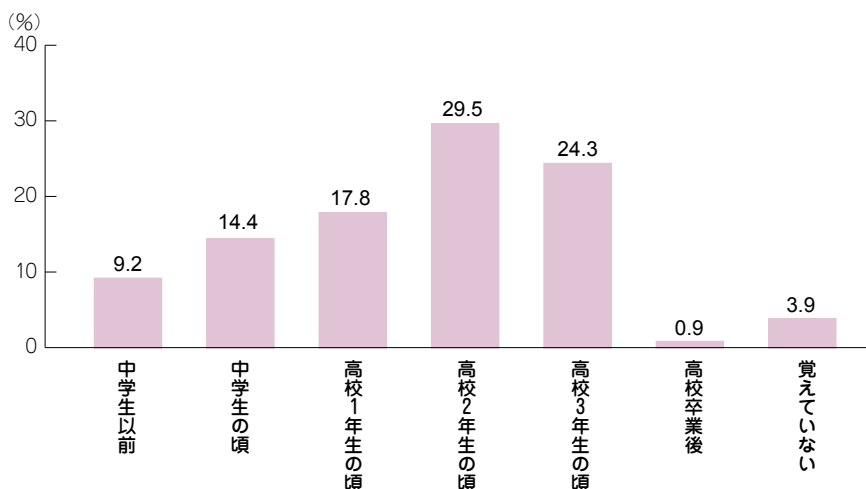
特別な注記がない限り、本調査結果の分析に用いた数値は、有効回答数4,070名を母数として算出している。また本調査結果で使用している百分比(%)は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位以下を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。

## 大学進学を意識し始めた時期は「高校2年生の頃」が最も多い



大学進学を意識し始めたのはいつ頃ですか。あてはまるもの1つをお選びください。

図1 大学進学を意識し始めた時期（全体）



注) サンプル数は4,070名。

表1 大学進学を意識し始めた時期（全体・学部系統別）

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
中学生以前	9.2	8.6	9.3	7.8	8.8	14.8	11.2	8.7
中学生の頃	14.4	12.9	13.5	14.3	23.2	17.7	19.6	14.1
高校1年生の頃	17.8	20.9	15.8	17.7	16.0	19.1	21.7	18.1
高校2年生の頃	29.5	29.5	29.9	29.0	28.0	28.6	25.9	35.6
高校3年生の頃	24.3	25.2	25.8	26.3	21.6	14.1	17.5	19.5
高校卒業後	0.9	0.2	1.5	0.5	0.8	0.4	0.7	1.3
覚えていない	3.9	2.6	4.2	4.5	1.6	5.3	3.5	2.7

注1) 学部系統の詳細はp.3を参照。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上高いものを示す。

注3) —は全体よりも5ポイント以上、—は10ポイント以上低いものを示す。

注4) ( )内はサンプル数。

大学進学を意識し始めた時期を図1に示したが、「高校2年生の頃」が29.5%と最も多く、次いで「高校3年生の頃」(24.3%)、「高校1年生の頃」(17.8%)であり、7割程度が高校の時に大学進学を意識しているという結果となった。しかし表1の学部系統別でみると、「教育」「保健その他」では「中学生以前」から「高校1年生の頃」

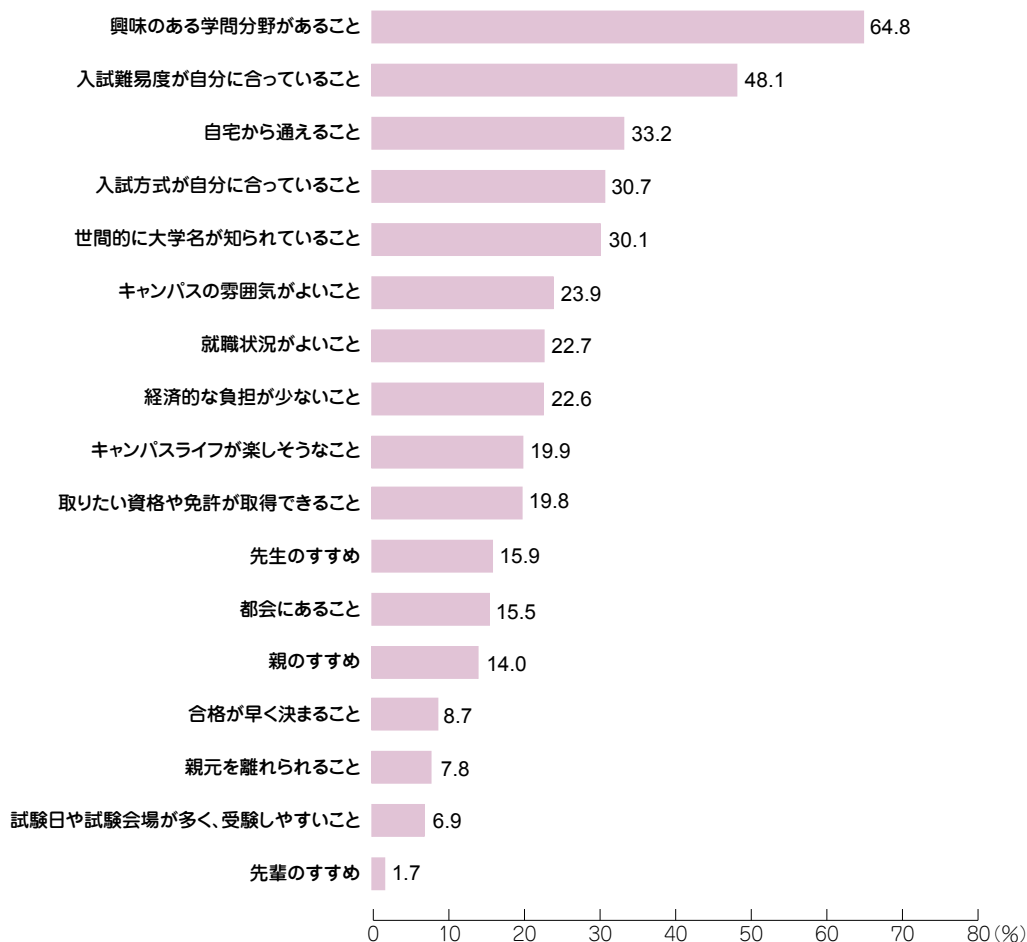
までに5割以上が大学進学を意識し始めていたことがわかる(それぞれ52.5%、51.6%)。「教育」と医・歯・薬・看護などの学部を含む「保健その他」は、職業との関連が明確な学部系統であるため、将来の職業に対する意識がそのまま大学進学への意識へとつながっているものと考えられる。

## 最も重視した点は「興味のある学問分野があること」



受験する大学・学部を決める際に重視した点について、あてはまるものすべてをお選びください。

図2 受験する大学・学部を決める際に重視した点（全体）



注1) 複数回答。

注2) 「上記にあてはまるものはない」は省略した。

注3) サンプル数は4,070名。

受験する大学・学部を決める際に重視した点を複数回答でたずねた。図2によると「興味のある学問分野があること」を重視して、受験する大学・学部を決定した者が64.8%と最も多い。つづいて「入試難易度が自分に合っていること」(48.1%)、「自宅から通えること」(33.2%)、「入試方式が自分に合っていること」(30.7%)など、自分自身が置かれている現状を重視して、受験す

る大学・学部を決定した者が目立っている。他方、「先生のすすめ」「親のすすめ」「先輩のすすめ」といった「他者のすすめ」を重視して、受験する大学・学部を決定した者が少数であること(それぞれ15.9%、14.0%、1.7%)より、現在の大学生は、主体的に自分が置かれた現状をふまえたうえで、受験する大学・学部を決定していると考えられる。

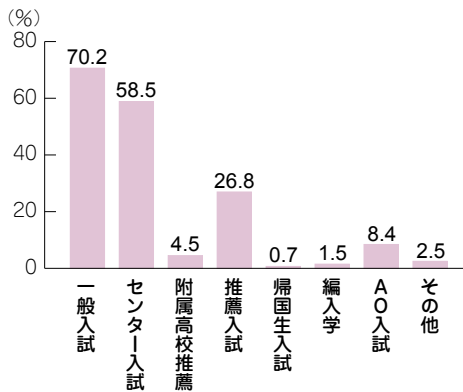
## 推薦入試・AO入試の利用が4割近くに



●大学受験のときの入試方法についてお聞かせください。

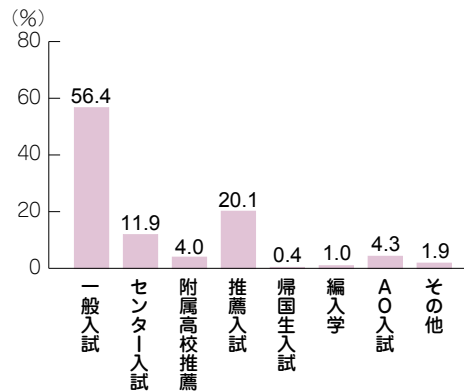
- 1) あなたは大学受験をしたとき、全体でどのような入試方法を体験しましたか。あてはまるものすべてについてお選びください。
- 2) 現在の大学・学部にはどの入試方法で受験しましたか。あてはまるもの1つをお選びください。なお、現在の学部・学科が国公立大学で、センター試験と一般入試（小論文、面接含む）をとともに受験した場合は「一般入試」とお答えください。

図3 大学受験方法：受験校全体（全体）



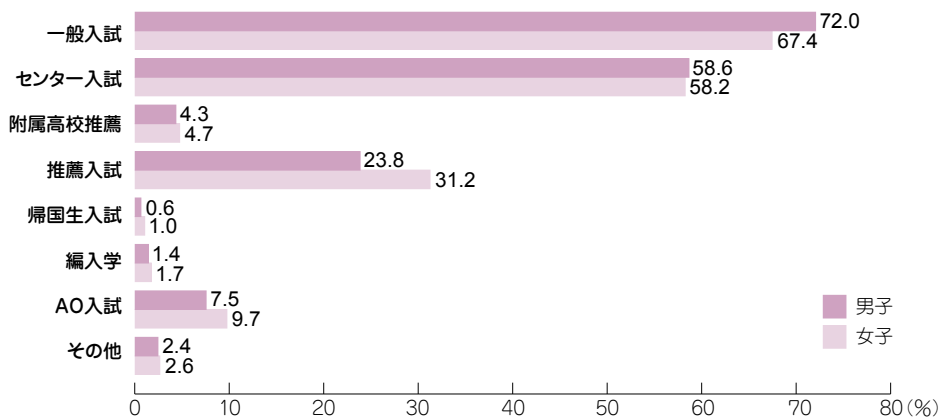
注1) 複数回答。  
注2) サンプル数は4,070名。

図4 大学受験方法：現在の大学・学部（全体）



注) サンプル数は4,070名。

図5 大学受験方法：受験校全体（性別）



注1) 複数回答。  
注2) サンプル数は男子2,439名、女子1,631名。

受験校全体に関する入試方法について複数回答でたずねた結果を図3に示した。「一般入試」(70.2%)や「センター入試」(58.5%)は、過半数に及ぶ多くの大学生が経験していた。また、「推薦入試」(26.8%)、「附属高校推薦」(4.5%)や「AO入試」(8.4%)を経験した大学生も合わせて4割近くみられた。

つづいて、「現在の大学・学部を受験した方法」を図4に示したが、「一般入試」(56.4%)が最も多く、次いで

「推薦入試」(20.1%)、「センター入試」(11.9%)、「AO入試」(4.3%)の順となっている。これらのことから、「推薦入試」や「AO入試」での受験が一般的になってきたと考えられる\*。

また図5で受験校全体に関する入試方法を性別に示したが、女子は男子に比べ、「推薦入試」(女子31.2%>男子23.8%、以下同)や「AO入試」(9.7%>7.5%)を経験した学生が多い傾向が示された。

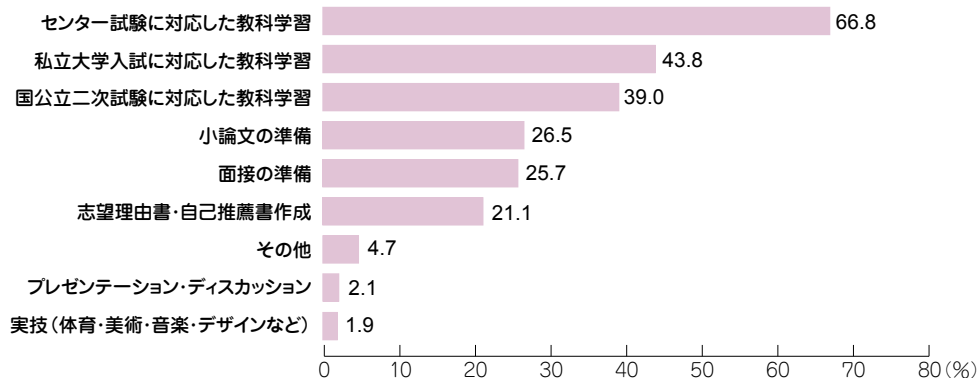
\*なお文部科学省の『2008年度「国公立大学・短大入試実施状況調査」』によると、一般入試（センター方式含む）：55.9%、推薦入試：35.4%、AO入試：8.0%、その他：0.7%であった。

## 教科学習に加え、推薦・AO入試への対策が目立つ



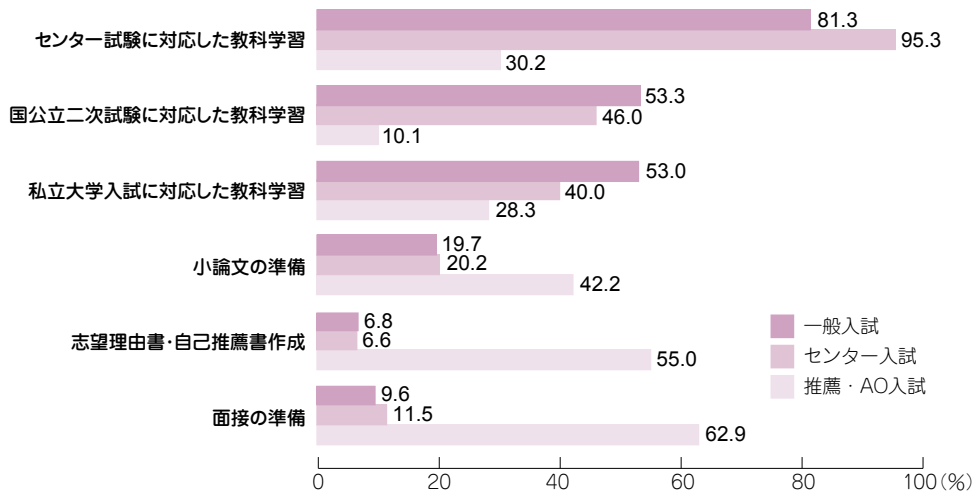
大学受験対策として取り組んだことはどれですか。あてはまるものすべてをお選びください。

図6 大学受験対策として取り組んだこと（全体）



注1) 複数回答。 注2) サンプル数は4,070名。

図7 大学受験対策として取り組んだこと（入試方式別）



注1) 複数回答。  
 注2) 「大学受験対策として取り組んだこと」の「プレゼンテーション・ディスカッション」「実技」「その他」は省略した。  
 注3) 「推薦・AO入試」には、「推薦入試」「附属高校推薦」「AO入試」を含む。  
 注4) 入試方式の「帰国生入試」「編入学」「その他」は省略した。  
 注5) サンプル数は一般入試2,294名、センター入試485名、推薦・AO入試1,154名。

図6に「大学受験対策として取り組んだこと(複数回答)」の結果を示したが、「センター試験に対応した教科学習」が66.8%と最も多く、次いで「私立大学入試に対応した教科学習」(43.8%)、「国公立二次試験に対応した教科学習」(39.0%)であった。一方、「小論文の準備」(26.5%)、「面接の準備」(25.7%)、「志望理由書・自己推薦書作成」(21.1%)など、推薦・AO入試への対策も

少なからずみられた。そこで入試方式別での結果を図7に示したが、「推薦・AO入試」による大学入学者では「面接の準備」(62.9%)、「志望理由書・自己推薦書作成」(55.0%)、「小論文の準備」(42.2%)への取り組みが、他の入試方式と比べて多い結果となった。このように大学入学者選抜方法の多様化にともない、「大学受験対策」も多様化していることがうかがえる。

## 入試難易度、入試方式で大学志望度に差



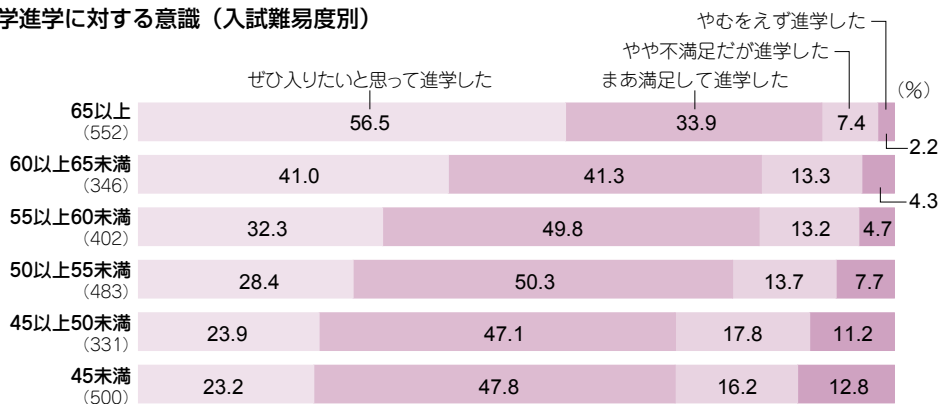
現在の大学・学部に進学したときの気持ちとして、もっとも近いもの1つをお選びください。

図8 大学進学に対する意識（全体）



注) ( )内はサンプル数。

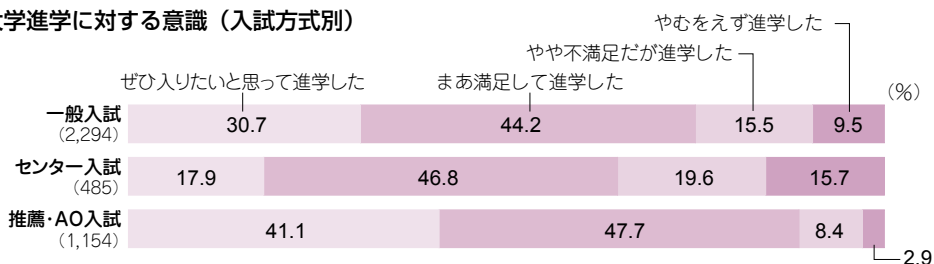
図9 大学進学に対する意識（入試難易度別）



注1) 入試難易度の詳細はp.3を参照。

注2) ( )内はサンプル数。

図10 大学進学に対する意識（入試方式別）



注1) 「推薦・AO入試」には、「推薦入試」「附属高校推薦」「AO入試」を含む。

注2) 入試方式の「帰国生入試」「編入学」「その他」は省略した。

注3) ( )内はサンプル数。

大学進学に対する意識、いわゆる大学の志望度について図8に示した。全体では「ぜひ入りたいと思って進学した」が32.4%、「まあ満足して進学した」が45.7%、で、両者を合わせるとおよそ8割の学生は現在の大学に満足感を持って入学していることになる。さらに図9で入試難易度別でみると、入試難易度が高い大学ほど志望度が高いことが確認できる。また入試難易度の偏差値「45以上50未満」「45未満」では、「やむをえず進学し

た」との回答が1割程度みられ、さらに図10に示した入試方式別では、「やむをえず進学した」との回答が「センター入試」で15.7%、「一般入試」でも9.5%と1割前後みられた。「やむをえず進学した」という学生が一定割合で存在することから、そのような学生を受け入れる大学側としても「やむをえず進学した」層の早期の把握と入学後のフォローなどにより、学生の大学生活への不適応を防ぐ手立てが必要と考えられる。

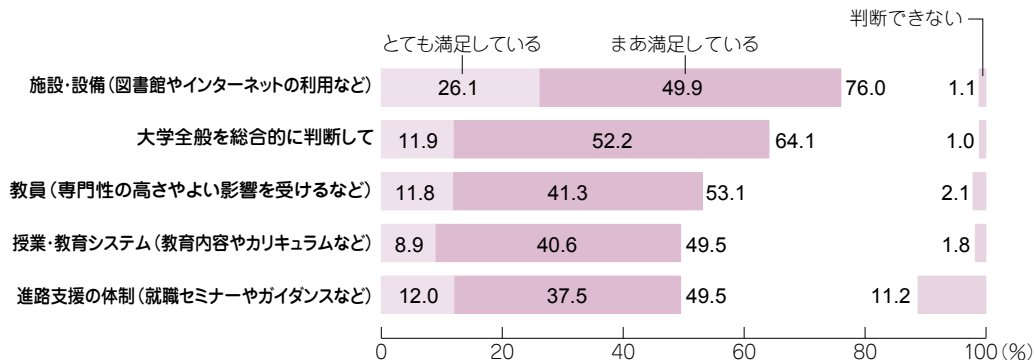


## 「授業・教育システム」「進路支援の体制」の満足度が低い



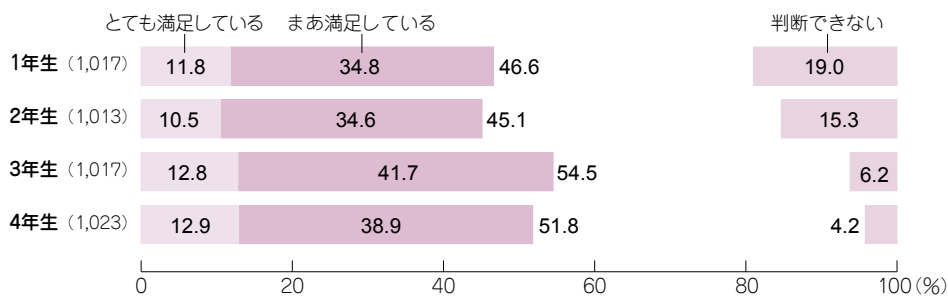
現在通っている大学について、どのくらい満足していますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図11 大学満足度（全体）



注) サンプル数は4,070名。

図12 大学満足度：進路支援の体制（学年別）



注) ( )内はサンプル数。

大学に対する満足度を、施設・設備、進路支援の体制、教員、授業・教育システム、大学全般の5つの側面であらわした。図11によると、全体では「施設・設備(図書館やインターネットの利用など)」に関する満足度が最も高く(76.0%)、「とても満足している」+「まあ満足している」の%、以下同)、次いで「大学全般を総合的に判断して」(64.1%)、「教員(専門性の高さやよい影響を受けるなど)」(53.1%)と続き、最も低いのが「授業・教育システム(教育内容やカリキュラムなど)」(49.5%)と「進路支援の体制(就職セミナーやガイダンスなど)」(49.5%)であった。「授業・教育システム」に含まれる指導方法、

カリキュラム等の改善は、現在さまざまな大学で取り組みが展開されているところであるが、学生側にその成果が十分にあらわれていない状況と考えられる。

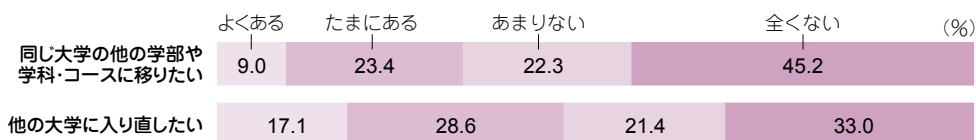
なお「進路支援の体制」は全体では5割を下回っているが、図12で学年別にみると「判断できない」という回答が1・2年生で2割程度にのぼることが確認できる。さらに3・4年生の満足度をみても、3年生54.5%、4年生51.8%(ともに「とても満足している」+「まあ満足している」の%)と5割を超えているが、まだ十分であるとはいえない状況である。

## 「他の大学に入り直したい」と思う学生は4割



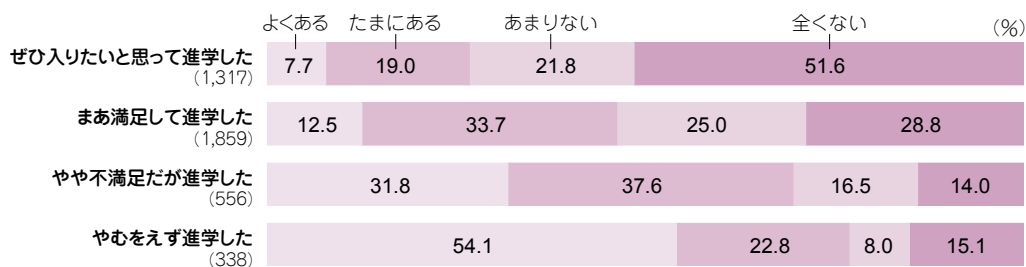
- あなたは現在の大学生活の中で、次のように思うことはありますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。
- 【「よくある」「たまにある」に回答した方にお聞きます】主な理由を簡潔にお書きください。

図13 大学での適応度（全体）



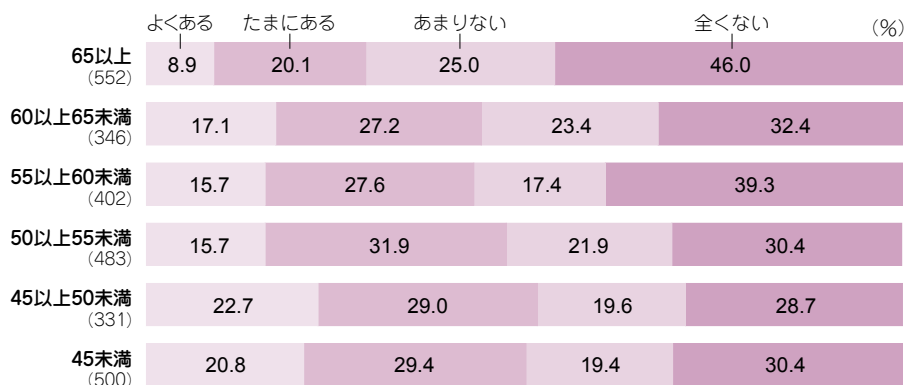
注) サンプル数は4,070名。

図14 大学志望度と大学適応度（「他の大学に入り直したい」との関係）



注) ( )内はサンプル数。

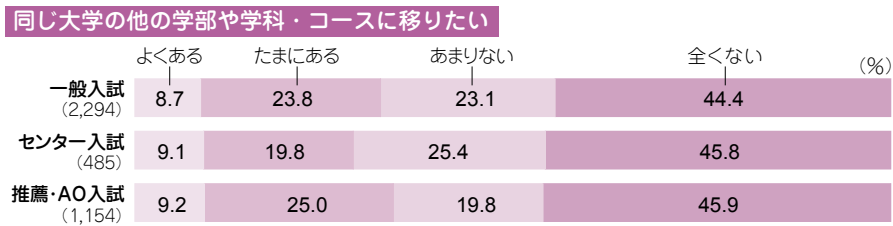
図15 大学適応度：「他の大学に入り直したい」（入試難易度別）



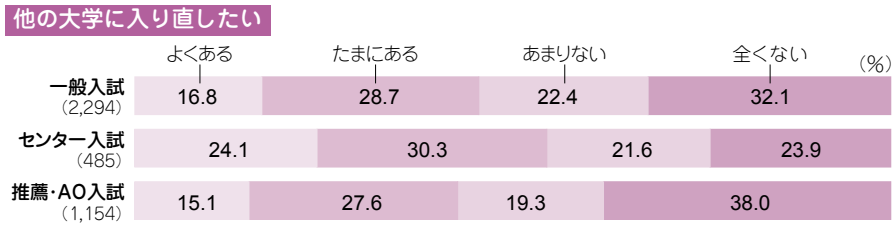
注1) 入試難易度の詳細はp.3を参照。

注2) ( )内はサンプル数。

図16 大学適応度（入試方式別）



注1)「推薦・AO入試」には、「推薦入試」「附属高校推薦」「AO入試」を含む。  
 注2)入試方式の「帰国生入試」「編入学」「その他」は省略した。  
 注3) ( )内はサンプル数。



注1)「推薦・AO入試」には、「推薦入試」「附属高校推薦」「AO入試」を含む。  
 注2)入試方式の「帰国生入試」「編入学」「その他」は省略した。  
 注3) ( )内はサンプル数。

表2 大学不適応を規定する要因（自由記述分析）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	記述内容例
1. 入学	不本意入学、大学ランク	第一志望ではなかった、本当は違う大学に行きたかった、大学のレベルが低い、世間一般の評価が低い
2. 学業・分野	他分野への興味、つまずき	他の分野の勉強がしてみたい、勉強のレベルが高そう
3. 環境・雰囲気	立地条件、雰囲気、経済事情	雰囲気が合わない、設備が整っていない、通学に時間がかかる、地元の大学に通いたい、経済的な理由
4. キャリア	就職、キャリア	就職に不利、卒業しても誇れるものがない
5. その他	情緒、友人関係	面白くない、友達関係がうまくいっていない

大学生がどの程度現在の大学に満足・適応しているのかを知るために、学内での転学部・転学科、編入学等他大学への再入学について、それぞれを希望する頻度をたずねた。図13によると、転学部・転学科を希望する頻度に関して、「よくある」と「たまにある」を合わせると32.4%で、3割を超える学生が自分の所属する大学の中で学部・学科・コースを変更したいと感じている。次いで、他大学への再入学を希望する頻度に関しては、「よくある」と「たまにある」を合わせると45.7%で、4割を超える学生が大学に入り直したいと感じている。

図14で大学への志望度との関連をみると、「やむをえず進学した」学生の5割以上が他の大学への入り直しを強く意識していることが確認できる。また入試難易度別でみると、偏差値「45以上50未満」「45未満」で5割を超える学生が他の大学への入り直しを意識している結果となった(図15)。しかし、偏差値「65以上」のい

わゆる難関大学は別にして、それに続く入試難易度の大学においても4割を超える学生が同様の意識を持っていることから、単純に入試難易度の高低だけでは判断できないことも留意しなければならない。さらに図16で入試方式別での結果を示したが、「他の大学に入り直したい」については、「センター入試」で54.4%（「よくある」+「たまにある」の%）と他の方式と比べ10ポイント程度高いことから、入試方式にも配慮する必要があると考えられる。

では、大学での適応度が低い要因はどこにあるのか。「よくある」と回答した学生の自由記述の内容を表2のように分類したが、上位カテゴリーの「1. 入学」に関する記述が最も多かった。「大学全入」時代で大学進学ハードルが下がったことによる安易な進路選択を戒めることもさることながら、不本意入学の学生自身の入学後の意識改革、さらに不適応を感じる学生を大学側で早期に発見し、個別に支援・フォローすることが求められよう。

## 理系の学部系統で授業への出席率が高く、大学外での学習時間も多い



- あなたは1週間のうち、だいたい何日大学に通っていますか。
- あなたは授業に平均してどの程度出席していますか。(単位：割)
- ふだんの学校外での時間の過ごし方について、次の項目は1週間で何時間くらいになりますか。それぞれについてあてはまるもの1つをお選びください。

表3 大学生の大学内・大学外での1週間の過ごし方など(全体・学年別・学部系統別)

		大学内 (平均)			大学外での時間の過ごし方 (週に「3~5時間」以上に回答した比率)			
		1週間での 通学日数	1週間を通して 大学で 過ごす時間	授業への 出席率	授業の予復習や 課題をやる時間	大学の 授業以外の 自主的な勉強	読書(マンガ、 雑誌を除く)	友だちづきあい
全体		4.4日	25時間06分	87%	26.6%	19.2%	27.2%	53.9%
学年別	1年	5.0日	29時間06分	91%	29.6%	15.2%	25.8%	50.2%
	2年	4.9日	28時間12分	88%	30.4%	16.4%	25.2%	53.1%
	3年	4.5日	24時間18分	87%	28.1%	20.4%	25.7%	54.4%
	4年	3.5日	19時間06分	82%	19.0%	25.0%	32.4%	57.7%
学部系統別	人文科学	4.3日	23時間36分	88%	30.7%	15.8%	33.4%	56.9%
	社会科学	4.2日	21時間36分	83%	17.7%	24.0%	28.1%	55.9%
	理工	4.8日	28時間18分	89%	35.1%	15.8%	23.4%	47.8%
	農水産	4.9日	33時間12分	91%	28.8%	15.2%	27.2%	52.0%
	保健 その他	5.0日	34時間00分	94%	35.4%	16.3%	21.2%	52.6%
	教育	4.5日	26時間30分	90%	21.0%	22.4%	25.2%	57.4%

注1) 学部系統の詳細はp.3を参照。なお、学部系統別の「その他」は省略した。

注2) 「授業への出席率」は「~割」としてたずねているが、便宜的にパーセント表記にしている。

注3) 「1週間を通して大学で過ごす時間」のうち、全体平均と比べ5時間以上下回るものを■、上回るものを■で示した。

注4) 「大学外での時間の過ごし方」のうち、全体と比べ5ポイント以上低いものを■、高いものを■で示した。

注5) 「1週間を通して大学で過ごす時間」の全体のサンプル数は4,057名、それ以外の全体のサンプル数は4,070名。

表3に大学生の1週間での通学日数、授業への出席率といった大学内での活動と、大学外での過ごし方について、全体と学年別、学部系統別の結果をまとめた。本調査では、「1週間での通学日数」の平均は4.4日、授業への出席率は87%であり、まじめに大学に通う学生像がうかがえる。しかし学年別でみると、4年生で通学

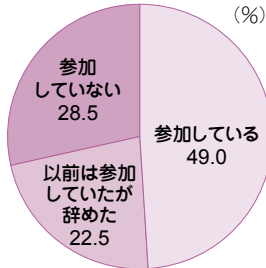
日数・出席率が低い傾向がみられ、一方の学部系統別では「理工」「農水産」「保健その他」のいわゆる理系学部で授業への出席率が高く、「授業の予復習や課題をやる時間」も多い傾向がみられた。これらのことから、学年や所属学部によって学習を中心とした時間配分に差が生じることが確認される。

# サークル、アルバイトについて

## サークルへの参加は49.0%、アルバイトは63.7%

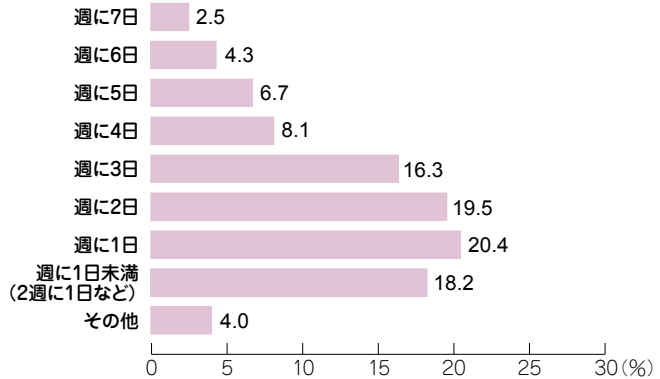
- あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか。  
●あなたは現在、アルバイトをしていますか。

図17 サークルや部活動への参加状況（全体）



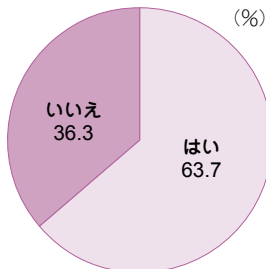
注) サンプル数は4,070名。

図18 サークルや部活動への1週間あたりの参加日数（全体）



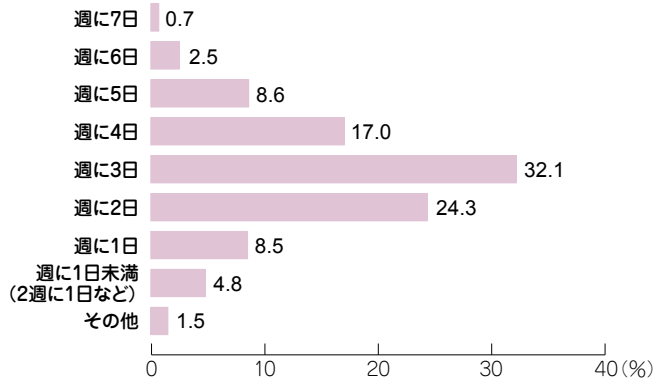
注1) 「あなたは現在、サークルや部活動に参加していますか」に「参加している」と回答した者のみ対象。  
注2) サンプル数は1,993名。

図19 アルバイトの実施状況（全体）



注) サンプル数は4,070名。

図20 1週間あたりのアルバイト実施日数（全体）



注1) 「あなたは現在、アルバイトをしていますか」に「はい」と回答した者のみ対象。  
注2) サンプル数は2,594名。

サークルや部活動への参加は49.0% (図17) であり、また図18に示した1週間あたりの参加日数では、「週に1日」(20.4%)が最も多く、平均の参加日数は2.4日\*となった。大学への通学状況・授業への出席率は高い(p.12を参照)ものの、サークルや部活動への参加

状況はやや低調とも考えられる。

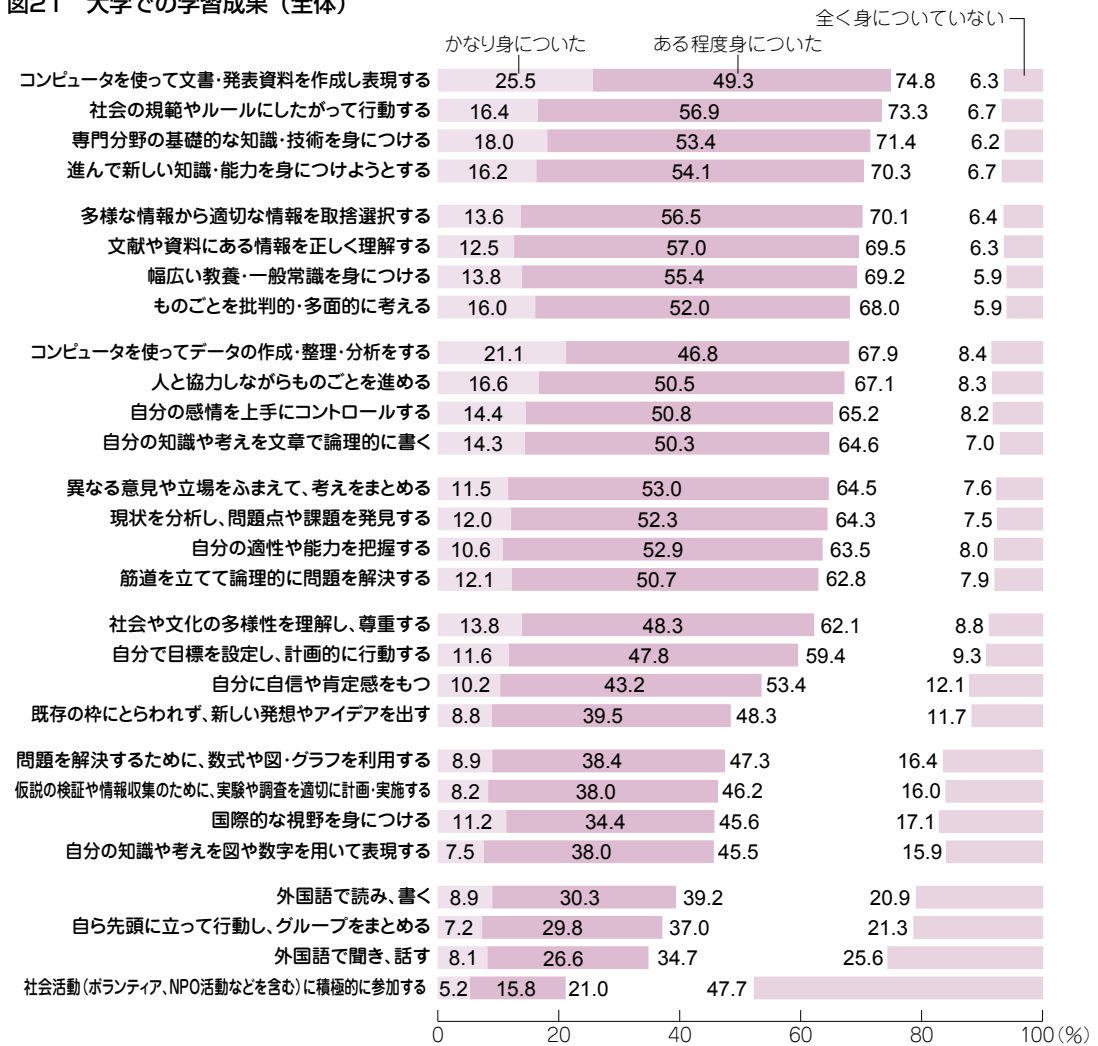
また図19にアルバイトの実施状況を示したが、63.7%がアルバイトをしており、実施日数としては「週に3日」(32.1%)が最も多く、平均では2.9日\*となった(図20)。

\* 「週に7日」を「7日」、「週に1日未満」を「0.5日」のように置き換えて、「その他」を除いて算出した。

## 外国語運用能力、リーダーシップに課題あり

**Q** あなたは次のようなことについて、大学生活全体を通じてどの程度身についたと思いますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図21 大学での学習成果（全体）



注) サンプル数は4,070名。

本調査では大学生の学習成果をとらえるため28の項目を設定した。「かなり身についた」と「ある程度身についた」の比率の合計が高い項目順に並べ替えたものが**図21**である。最も高かったのは「コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する」(74.8%)であった。一方、「社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)に積極的に参加する」(21.0%)が最も低く、「外国語で

読み、書く」(39.2%)や「外国語で聞き、話す」(34.7%)といった外国語運用能力に関する項目も低かった。さらに「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」(37.0%)も低かったが、「人と協力しながらものごとを進める」(67.1%)といった協調性に関する項目は高く、現在の大学生の対人関係のあり方がうかがえる。

## 「努力すればむくわれる」は4割、学校段階が進むほど低下

**Q** あなたは次のようなことならについてどう思いますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図22 大学生の社会観・就労観（全体）

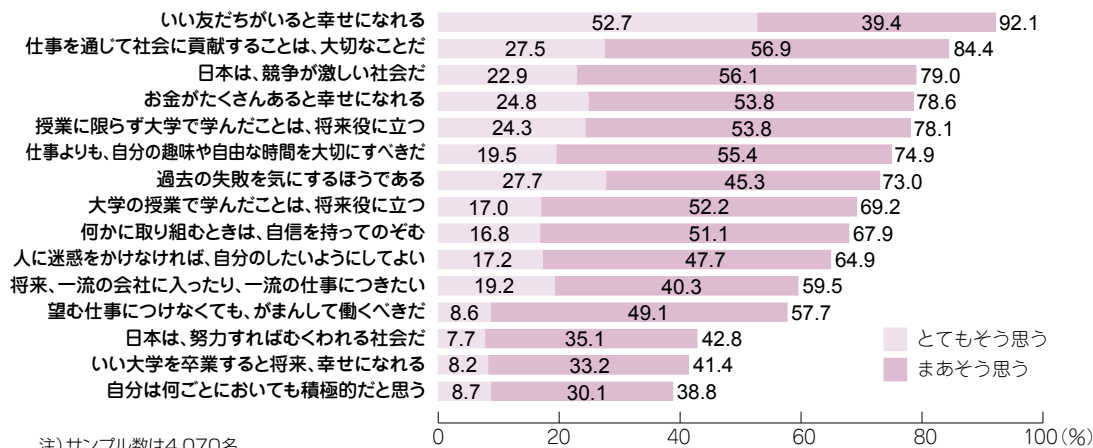
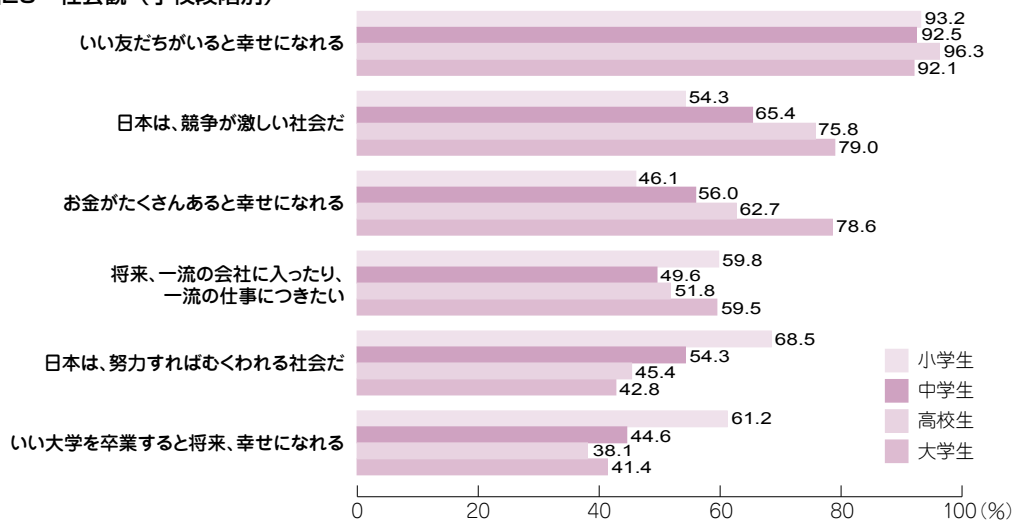


図23 社会観（学校段階別）



注1) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2) 学校段階別の小学生・中学生・高校生は、ベネッセ教育研究開発センター「第4回学習基本調査・国内調査報告書」（2007年）より引用。

注3) サンプル数はそれぞれ小学5年生2,726名、中学2年生2,371名、高校2年生4,464名、大学1～4年生4,070名。

大学生の社会観などを図22に示したが、上位3項目は「いい友だちがいると幸せになれる」(92.1%、「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%、以下同)、「仕事を通じて社会に貢献することは、大切なことだ」(84.4%)、「日本は、競争が激しい社会だ」(79.0%)であり、下位3項目は「日本は、努力すればむくわれる社会だ」(42.8%)、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」(41.4%)、「自分は何ごとにおいても積極的だと思う」(38.8%)であった。

また図23に学校段階別での違いを示した。学校段階が進むにつれ比率が高くなっている項目は「日本は、競争が激しい社会だ」「お金がたくさんあると幸せになれる」であった。一方、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」では逆の傾向がみられた。現代の大学生には、現在の日本社会は競争が激しいうえに努力してもむくわれるとは限らないという厳しい現状認識があることが垣間みえる。



# 大学生の学習・生活実態調査

## 調査企画・分析メンバー

山田 礼子 (同志社大学教授)

杉谷祐美子 (青山学院大学准教授)

望月 由起 (横浜国立大学准教授)

山田 剛史 (島根大学専任講師)

樋口 健 (Benesse教育研究開発センター研究員)

十河 直幸 (Benesse教育研究開発センター研究員)

※所属・肩書きは、調査時のものです。

本調査の詳細な報告書(160頁、頒価1,000円)を刊行しております。報告書をご希望の方は、Benesse教育研究開発センターのWEBサイトの「調査・研究データ→報告書の申し込み」より、必要事項のご入力をお願いします。なお、この報告書は書店ではお買い求めになれません。直接、Benesse教育研究開発センターにお申し込みください。

Benesse教育研究開発センターで実施している各種調査結果は、

<http://benesse.jp/berd/>または **ベネッセ 研究** **検索** で検索できます。

